

## 巻頭言 「イエスを捜す」

宇野 元

大切な存在がいなくなる。その存在を懸命に捜す。心に痛みをおぼえながら捜す。不在の悲しみを味わいながら。だれもが知る、私たち人間の経験があります。そしてそのようなとき、私たちは思います。共にあったとき、どれだけ近くいたか？ 大切な存在を、どれだけ理解していただけるか？

共にある——このことは、ふだんの、何事もないかのようなときに、それだけ身近で、いつも親しく感じられるという事情ではない。このことは、神との関係についても当てはまるでしょう。神が共におられます。このことの深さを思い巡らすようみちびかれます。何事もないかのようなときに、私たちはそれだけ神に近い、そういう事情ではありません。神が共におられる。このことは、私たちにとって、恵み深い事実です。私たちの生活原理や、ライフスタイルの枠のなかに収められない事実です。

福音書に、両親がイエスを捜した出来事が記されています。二人は大切な存在を見失い、三日間、懸命に捜しました。意味ぶかいことです。彼らはエルサレムの神殿に赴きます。そこから来たのですが、もういちど引き返します。するとそこでイエスに再会します。そして面白いことに、なぜ、わたしを探し回るのか、と言われてしまいます。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」(ルカ 2, 49)。イエスがいなくなる。そのような時を経験します。しかし、イエスはいなくなるのではありません。私たちが神を礼拝する所にいてくださいます。

イエスを捜す。思えば、福音書にはそれが繰り返し記されています。イエスはしばしば、弟子たちから離れられた。一人、祈るために。一人、苦難を引き受けるために。弟子たちは、そのたびに、その存在を懸命に捜します。心に痛みをおぼえながら捜します。不在の悲しみを味わいながら。最後に十字架において、決定的な不在感を味わいます。けれども「三日」ののち、日曜日の朝、イエスに再会します。弟子たちはしばしの悲しみの時をへて、以前は気づかなかった深い事実を知るようみちびかれます。救い主が共におられる。この恵み深さを、より深く、より確かに知る者にされます。

困難なとき、私たちは寄るべがないかのように感じます。イエスが見えないことが試練になります。そのような時、ご一緒におぼえましょう。イエスは天の御父と共におられます。そして、私たちのためにとりなしておられます。私たちの思いを超えて、近くいてくださいます。